

## 全国水平社創立100周年 ～人の世に熱あれ、人間に光あれ～

毎月11日は「人権を確かめあう日」です

1922年(大正11年)3月3日、京都の岡崎公会堂で行われた「全国水平社」創立大会から、今年の3月で100周年を迎えました。全国水平社創立の際に起草された「水平社宣言」は「日本初の人権宣言」と言われています。この水平社宣言の最後の一節「人の世に熱あれ、人間に光あれ」という言葉を聞いたことがある人も多いのではないでしょうか？この言葉に込められた当時の人々の思いや願いから、今を生きる私たちは何を知り、何を学ぶことができるのでしょうか。

差別を生み出す様々な要因として「区別」と「差別」を混同すること、そして十把ひとからげに決めつけてしまうことがあります。コロナ差別でいうと、新型コロナウイルス感染症は医学の問題で、コロナ差別は社会問題です。新型コロナウイルスに感染したことは病気の問題、医学の問題で、差別をつくりだすものではありません。また、差別というものは、差別する側が勝手に差別の対象者を規定し、差別する理由をまことしやかに作りあげ、勝手なイメージをもとに、十把ひとからげに社会から排除しようとしています。このことは、水俣市民全体が排除の対象とされた水俣病問題や福島原発事故による放射性物質放出による福島差別の問題、HIV感染者やハンセン病問題などからとらえることができるでしょう。

さらに差別には、差別の現実を覆い隠してしまう力が働きます。「コロナに感染した」と言えば、自分だけではなく、家族まで差別を受けるかもしれないと思うと、怖くて口を閉ざしてしまいます。差別の厳しさ、怖さが被差別当事者を黙らせてしまい、コロナ問題の解決を遅らせるという事態を招いています。

現在も、コロナ差別にとどまらず、同和問題や障がい者問題、女性の人権にかかわる問題など様々な人権問題があり、残念ながら、年々人権課題が増えてきているように感じます。

100年前に差別の解消を目指した人たちが、この現状を見るとどう思うのでしょうか？

また後世の人たちが、この現状をどのように捉えるのでしょうか？

私たちは、いつまでもこのようなことを繰り返さないためにも、歴史に学び、正しく判断する力が必要です。

私たちが未来に残すものは、差別ではなく夢や希望です。それは、私たち一人ひとりの意識や行動にかかっています。

2022.3

宇陀市人権啓発活動推進本部

※このビラへのご意見・ご感想は

☎0745-82-2147またはjinken@city.uda.lg.jp

